

# 日本語をとおしてお互いに知り合う

## —吉岡英幸氏へのインタビュー—

語り手：吉岡英幸

聞き手、および本稿の構成・編集：古屋憲章・河住有希子

### 0. 本インタビューが行われた経緯，およびインタビューの概要

私（古屋）は以前から日本語教師としての吉岡先生にインタビューをしてみたいと思っていた。その背景には、次の二つの問題意識<sup>1)</sup>があった。一つは、自分が自身の生業である「日本語教育」がこれまでどのように行われてきたかをあまり知らないということである。私は、日本語教師養成講座に通い、日本語教育能力検定試験に合格し、日本語学校の非常勤になるという、ある種、典型的な過程を経て、日本語教育の世界に入った。養成講座に通っている当時、私はすでにあるものとして、様々な「日本語教育」に関する知識や技術を受容していた。しかし、そこで「日本語教育」に関する知識や技術とされていたものにも、それが「日本語教育」に関する知識や技術であるとされるに至る過程があったはずである。そういう、いわば「日本語教育」が「日本語教育」になっていく過程を、実際に体験されているであろう吉岡先生から自身の経験に関する語りとして、聴いてみたいと思った。もう一つは、吉岡先生から「日本語教育」のこれまでを聴くことをとおして、「日本語教育」のこれからを考えてみたかったということである。もちろん、自身のこれまでを振り返り、自身の教育観を明確にし、教育観に基づき実践を考えることは必要である。しかし、私は、歴史的な経緯と何の関係もなく、日本語教育に携わっているわけではない。好むと好まざるとに関わらず、私もまた、「日本語教育」のこれまでの延長線上にいる一人である。そのため、自身の「日本語教育」のこれからを考える上で、吉岡先生のような先人からこれまでの「日本語教育」に関する同時代的証言を聴くことが重要ではないかと考えた。

本稿は、2012年7月22日に行われた吉岡英幸氏へのインタビューをもとに、作成された。インタビューは、約3時間にわたり行われ、日本語教師としての吉岡氏の半生が語られた。（聞き手は、本稿の構成・編集を担当した古屋と河住である。）本稿は、インタビューの文字化資料を「吉岡氏がどのように日本語教育観、および日本語教師観を形成したか」という観点に基づき、一人称一人語り形式で再構成することにより、作成された。そのため、本稿では、吉岡氏の日本語教育観、日本語教師観が形成されたと思われる日本語教育との出会いから、早稲田大学日本語研究教育センター（現、日本語教育研究センター）に着任するまでが主に扱われている。（吉岡氏の詳細な経歴に関しては、末尾の「表：吉岡英幸氏と日本語教育」を参照のこと。）

吉岡英幸，他／日本語をとおしてお互いに知り合う

## 1. 日本語教育との出会い

### 1-1. 日本語教育をやるとは思っていなかった

私が学部の2年，もしくは3年のときに語研（語学教育研究所）に出入りし始めたんです。たぶん3年生のころかな，1965年ごろだと思うんですけどね。学内でアルバイトを探しているということを同級生に聞いて，行ったところが語研だったんです。7号館の5階にあったんですが，訪ねていくと，「じゃ，こういう仕事をしてくれ」って言われてした仕事が，教材のコピー<sup>2)</sup>なんですね。当時初級の教科書はできていたと思うんですが<sup>3)</sup>，中級の教科書はなくて，先生たちがそのつど手書きで作成されていたんです。「用意したものを，箱に入れておくから，時間のいいときに来て，それをコピーして，穴をあけ，ファイルをして」と言われて。で，私は空いた時間に行き，そこでコピーをしていたんです。時給100円くらいだったと思います。最初は不思議なところだと思いましたね。普通に日本語を話す留学生はよく来るし。私はそれまで外国人と身近に接したことがなかったものですから。語研というのは，英語，フランス語，スペイン語，朝鮮語，中国語などの外国語を教えるところで，その中に，留学生に日本語を教える日本語教育部門が設置されていたんですね。私がコピーをしていたのが日本語教材だったわけです。それが私と日本語教育との最初の出会いでした。

初めはアルバイト生として，仕事があるときだけ行っていたんですが，そのうち暇があるといつも顔を出すようになりました。先生たちにはずいぶんお世話になりました。特に，木村宗男先生にはその後もずーっとお世話になったんですけどね，同じ広島出身っていうこともあって。よく大隈会館へ食事連れて行ってもらいましたし，進路などに関してもいろいろ相談に乗ってもらったりしました。

で，そのうち留学生とも顔見知りになって，早稲田祭で留学生が日本語劇をやるっていうと，練習につきあったり，本番でプロンプターをやったりとかね。時々，木村先生の授業を覗いたりするようになったんですよ。でも，まだそのころは，自分が日本語教育をやるうなどとは思っていませんでした。漠然とですが，頭には国語教師のイメージがありましたから。

### 1-2. 日本語教育講習会をのぞいて専門分野のあることを知る

語研に出入りし始めたとき，講習会の手伝いを頼まれたんです。この講習会は，1964年から毎年開かれていたもので，現役の日本語教師やこれから教師を目指そうとする若い人たちが受講していましたね。当時，東京日本語学校以外は，日本語教育の講習会はあまり行われていなかったはずですよ。3，40人出席者があったように思います。日本語の専任の先生が，それぞれご自分の研究テーマでお話しされていました。その講義内容を載せたものが，『講座日本語教育』です<sup>4)</sup>。これは，学会誌以外日本語教育の専門誌がほとんどなかった時代に，貴重な役割を果たした雑誌でした。私は講習会の開始時間の前に，会場の入り口に机を出し，受付を作りそこに座っていたんです。仕事は希望者に既刊の『講座日本語教育』を売ることです。開始時間がすぎると，受付は必要なくなるので，会場の隅っこのほうに座って話を聞いていました。もぐりですね，修了証はもらえませんでした。木村先生の教授法や，永保（澄雄）先生の略画の描き方や視覚教材を使った指導法の講義，森田（良行）先生の文法の講義などが印象に残っています。もっとも，このころはまだ日本語教育を目指そうとしていたわけではないので，気楽に聞いていました。日本語教育にもいろいろな

専門分野があるんだな、日本語教師になるのも、いろんな勉強をしなければならず大変だな、というようなことを思いましたね。

### 1-3. 教室を活性化できるような授業のあり方—木村先生の影響—

最初に見た日本語の授業が、木村先生の授業だったというのは、幸運だったと思うんですよ。後々まで、その影響を受けましたしね。感心したのは、木村先生の授業には随所に工夫があったんですね。今でも覚えているのは、助数詞を教えるところで、1本、2本というような数え方を導入しておいて、学生たちに、じゃ、数えてごらん、と言って、先生が、上着の内ポケットから万年筆を1本、続いて2本出す。で、3本、4本までくると学生がびっくりするわけですよ。ポケットから次々に出てくる、何本あるのだろうと。事前にポケットに12本ぐらい用意してあるんですね。10本を超えると、学生から歓声があがり拍手が出る。これは楽しいですよ、見ていて。その授業のすごさというようなものは当時の私にはわからない。学生といっしょになってげらげら笑って見ていました。だから日本語を教えるというのは、そのようにして教えるものだというふうに思っていました。そういう意味で影響を受けたんだろうと思うんですよ。教室を活性化できるような授業のあり方ですね。楽しい授業になるように工夫をすることが大切だということは、私が教えるようになって、ずーっと心がけてきたことです。

## 2. 日本語を教え始める

### 2-1. 教師は前面に出る必要がない

正式に私が日本語を教え始めたのは、大学院に入った年、1967年からです。大学院に入学したとき、仕事というか、アルバイトを探していたんですね。そのとき、語研の専任の先生をされていた大島(正二)先生から紹介されたのが、海外技術協力事業団、現在の国際協力機構・JICAですね、そこの日本語教師でした。大島先生は東大の言語学の三根谷(徹)先生のお弟子さんで、中国学を専門にしていた方なんですね。後に北海道大学に移られました。三根谷先生が、海外技術協力事業団の日本語教育の顧問のようなことをやっていた関係で、大島先生も一時期そこで日本語を教えていらっした。それで話があったんです。事業団は外務省の外郭団体で、開発途上国から技術研修生を招いて、技術研修を行っていたんですね。で、「TICで日本語教育をやっているの、教えないか」というふうに言われたわけですよ。TICというのは、市ヶ谷にあったTOKYO INTERNATIONAL CENTERのことで、そのビルに研修員の宿舎や教室などがあったんですね。私はアルバイトを探していたときだったし、面白そうだったので、「お願いします」とやらせてもらうことにした。それが、実際に日本語を教えるようになったきっかけでした。ですから、私は技術研修員の日本語教育からスタートしたわけです。

事業団の日本語コースは二種類あったんです。一つは昼間の集中コースで、本来技術研修は英語の通訳がつくのだけれど、通訳がつかないコースがあり、本研修の前2か月とか3か月、日本語教育を集中的に行ってから研修に出るコースです。もう一つは夜のコースで、研修のためではなくて、せっかく日本に来たのだから日本語の会話ぐらい覚えたいという人のためのコースです。まず最初に教えたのは、夜のコースです。(海外技術協力事業団の教材を出してくる)これが夜のコースのテキストの『NIHON-GO KAIWA』で、3巻ありました。三根谷先生や大島先生がお作りになった

吉岡英幸，他／日本語をとおしてお互いに知り合う

と聞いています。ローマ字表記の日本語と、英語の対訳があり、英語で簡単な文法の説明がしてあります。ポケットサイズで、研修員がこれを持ち歩き、見ながら会話ができるようになっているテキストなんですね。夜の日本語コースは、福利厚生の一環として、週4日間、月火木金、6時半から8時まで、2か月で終了するコースです。夕方研修から帰ってきて、興味がある人たちが教室に顔を出す。気軽にだれでも参加できるという日本語のクラスなんですね。義務じゃないから、楽しいクラスをやらなかったら誰も来ないんです。最初出席しても、つまらなかったらみんな途中で辞めてしまう。工夫をしなきゃいけないんですね。文型や語彙を教えるためにひたすらパターン・プラクティスなんかをやっていたら、だれも来なくなるんですよ。このようなコースで、最初に実践を行ったということが、たぶん、私の日本語教育の原点になったんだろうと思います。

場面シラバスの会話のテキストですが、教えるときはその課の内容を頭におきながら、提出順序はやりやすいように自分で組み立てていました。教科書は最後にどんな内容が書いてあるか確認のため開かせるだけで、途中で開けさせることはない。そのためには手ぶらでは教えられないので、場面設定などのための視聴覚教材を教室に持ち込んで、使用しました。だから、教師になりたてのころから、雑誌などでカラーの絵や写真を見つけると、すぐに切り取って、板目紙という厚紙に貼っていくというようなことをやりましたね。また、いろいろな国の切手やたばこなどの実物、野菜や果物や料理、動植物や乗り物、職業などの写真を集めて、これらも板目紙に貼っていくんですよ。で、それを教室に持ち込んで、紹介、買い物、タクシーの乗り方などの練習をするわけです。あとで、大学などで構造シラバスの教科書を使用するようになって、基本的に私は同じ教え方をやりました。自分のことや学習者のこと、その時のニュースなどを話題にしながら、その場で新しい学習項目を先にやっちゃうんですね。新出語や新出文型などを理解させたあと、今度はいろんな場面やいろんな条件を投げかけて、学習者同士でやりとりをさせる。この部分が授業の中で最も重要で、中心にならなければいけないと思っていました。この考えは今も変わりませんが。教師は前面に出る必要がない。それこそ裏方でいい。できるだけ学習者に活動させる。教師はそのような活動がしやすいように、いろいろな小道具などを用意する。そのような環境を作ることが大切だと思います。もちろん、最初からこのようなことを考えたわけではなく、やっているうちに、学習者の反応などを見ながら、だんだんそういう考え方が固まってきたように思います。その環境を整えるためには、補助教材の作成など、多くの準備と実践での工夫がいるのです。

## 2-2. 学習者の視点に立つ

私のいつも心がけていることとかいうか、授業の中での基本的なスタンスというのは、学習者の視点に立つということですね。それはずーっと現在まで変わっていません。

コースデザインに関した例でいえば、学習者がどんな日本語能力や情報を得たいと思っているか、そのためにはどんなカリキュラムが適切かなども、学習目的や対象者によって、それぞれ考えなければいけないのではないかと考えていました。現実には難しい問題ではありますけどね。今でも忘れないのは、事業団の昼間の集中コースで、鉾山コースというのがありました。教科書は一応決まったものがあったんですが、話を聞いてみると、研修員は研修場所が各地の鉾山ですから、山の中へ入っていくというんですね。8週間のコースで学習時間の余裕は十分ではない。だから、これは一般的な語彙や文型をやってもあまり役に立たない。本当に必要な日本語をしばって教えたほうがいいと考えたんですね。で、鉾山協会へ行って、資料を見せてもらい、鉾山でよく使われる言

葉を教えてもらって、教材を作ったんです。「危ない！」っていう言葉とか、「発破をかける」とか、「坑道」とか、「落盤」とか、大切な言葉ですよ。そういう語彙や場面を入れて、教えた記憶があるんです。決まった教科書や事前に決めた授業計画があったとしても、基本的には、学習者に合わせて、学習内容を考えるということですね。本来はコースごとに教材を作らないといけないでしょうけど、現実にはいろいろ大変なので、可能な範囲で対応するということになります。

もう一つ、忘れられないコースがあります。竹細工コースというのがあったんです。このコースは、タイやビルマやインドネシアなどから来た6人ぐらいのクラスでした。研修員たちは九州などへ行って、竹でかごなどの工芸品を作るという研修だったんですね。朝10時にTICの自室から教室へ来るでしょう。「おはようございます。さあ、始めましょう」とか言って授業を始めるわけですよ。「私」とか「あなた」とか、初級の最初の課の「紹介」なんです。目がとろんとしてるんですよ、みんな。目が死んでるんです。こんなに目が死んでいる人を、私は初めて見たと思いました。みんながそうなんです。午前中終わって、午後の担当の先生に「どうだった？」って聞いたたら、「全然覚えてくれない」。三日たってもね、「私」と「あなた」の言葉の意味も分からない。それで、背景を知りたいと思って、担当職員に聞いたんです。それで分かったことは、研修員たちの生活は、本国では毎日朝起きたら、筵（むしろ）の上に座って、日がな一日、竹を編んでいるというんですね。机の前に座って、教室で勉強するというような経験はほとんどないんじゃないかなっていうんですよ。考えたらそのとき彼らは、大変なカルチャーショックを受けていたわけですよ。近代的なビルの部屋に寝起きし、ほかの国の人と教室で机の前にすわり、外国語を学べと言われても、頭に入るわけがないだろうと思いましたね。私は何となくコースの責任者のような立場だったから<sup>5)</sup>、悩み、いろいろ考えて、このまま決まったとおりのカリキュラムで授業をやってもだめだと思いましたね。TICに体育館があったんですね。で、朝教室に行って、「ピンポン」って仕草で示したらうなずきから、体育館に行って、いっしょにピンポンをやり始めたんです。それで、「1, 2」とか点数を数えていると、自分たちもまねをして「1, 2」と、いっしょに得点を数え始めた。「しめた！」と思って、ピンポンをやりながら、カウントすると、いっしょにやってくれる。勝つと笑う。目がいきいきしてきた。それで、「私5」とか、「あなた6」とか得点を数えると、うなずき、自分からも同じように言い始めた。「私」と「あなた」や数が言えるようになったんですね。それから、少しずつ単語も覚え始めました。そのあと、毎日ピンポンというわけにもいかないので、外に連れ出すことにしたんです。一緒に駅に行って「切符、いくら?」「20円」、とかって言いながら、20円出して、切符を買う。「デパートへ行きましょう、買い物をしましょう」と言い、デパートの中を歩きながら事物の名前を教えていくんですね。ついでに、必要なものの買い物をさせたりする。カリキュラムを切り替えちゃったんですね。そうすると、だんだん言葉が入り始めたんです。それで、10日くらいたって、何とか目が、死んだ目じゃなくなって、それでやっと決められた教室で、研修員の様子を見ながら授業をやるようになりました。

そのときは、私もすごく必死でした。コミュニケーションをとることのできない環境で、無理に授業をしても何も生まれなと思いましたね。あの経験は今でも忘れられません。こちらから一方的に押しつけて教えることの理不尽さというようなことですね。そのときの研修員の目や顔の表情を思い出すと、我々日本語教師もうっかりすると非人間的なことをやってしまう可能性があるということ、そういうことを心しなければいけないと思います。教師は、学習者を常に見て、今どういう状況にあるかとか、何を求めているかということ把握することが、いかに大事かということ



吉岡英幸，他／日本語をとおしてお互いに知り合う

す。そのためには、いつも学習者の視点に立って見たり考えたりし、当初立てた計画にこだわらず、柔軟に対応することも大切なんだろうと思います。

### 2-3. 教材を作ることで得られるものは大きい

会話のテキストの中にね、デパートでの買い物の課があって、「何階に何がある」「何々は何階にある」という存在文、所在文を教える課なんですけど、この学習内容を教えるために、伊勢丹デパートへ行っただけですよ、家内と。総務課で、日本語教材を作るため写真を撮りたいというようなことを説明すると、お客を撮らないという条件で、簡単に許可をくれた。これをしてくれとって、腕章を渡されましたが。当時はビデオカメラもないので、カメラにスライドフィルムを入れ、家内をモデルにして、受付で尋ねているところとか、受付の女性が案内をしているところ、ネクタイ売り場に行ってウインドウをのぞいているところ、「それを見せてほしい」と言って指差しているところ、店員が「これですか？」とネクタイを持つところというように、1コマずつ撮っていきました。授業では1コマずつそれを見せながら会話をさせました。このスライド教材作成は、後に東京外大の日本語学校に行ったときにもやりました。学校行事で高尾山ハイキングに行ったとき、学校を出るところから、切符を買うところ、電車の乗り降り、リフトに乗っているところ、山を登っているところ、頂上で弁当を食べているところ、歌を歌っているところなどをスライドで撮って、授業のときそれを見せながら会話をさせたり、ストーリーを語らせるという形の独話体の練習、聞き手を先生や先輩に代えることによる待遇表現の練習というようなことをやりましたね。

回転寿司などない時代、寿司屋なんてのは、高いからめったに行けないんだけど、あるとき寿司屋に入ったら、寿司の日というポスターが貼ってあったんですよ。おいしそうな寿司の大きな写真。これは欲しい。寿司などはリアルにうまく絵に描けないんです。で、寿司屋さんに「これ、外国人に日本語を教えるとき使いたいで」って言って、もらってきて。それで、寿司の部分だけ切って板目紙に貼って財産とした。そういうことをしょっちゅうやっていました。そのころ、早稲田にも若い先生が何人かいて、お互いに情報交換したりしていました。電車の吊り広告にはいい写真があるんですが、それをもらいに行った人もいましたね。倉庫に山ほど積んであるポスターからいいものを選ぶのが大変だったと言っていました。木村先生に影響を受けた人たちは、そういうことをよくやっていたんですね。私だけではなかったと思うんです。

さきほど買い物の課のスライド教材のことを話しましたが、絵教材でも作りましたね。大きい紙、模造紙を買ってきて、デパートの地下2階から屋上までの各階のフロアの区切りを描いて、各階にスーパーのチラシや雑誌の写真から切り取った、食品とか、衣料とか、電気製品などを貼っていくわけです。その上に、スーパーのチラシから切り取った値段を示す数字を貼ります。エスカレーターやエレベーターも描き入れる。お手洗いや男女用のものを何階かに描く。屋上は、あの頃は屋上は子供の遊園地になっていたんで、その絵を描く。それで、1階、2階、3階と、「階」の数え方を教えるんですね。「～は～階にあります」とか、「～階に～がありますか」とか、「～はいくらですか」などの練習をするわけです。数字は教科書では100までしか出ていなくても、買い物をした研修員には値段は大切ですから、すぐに万の位まで覚える。つまり、教科書に出ているその課の語彙も文型も表現も、この1枚の教材で全部教えられるわけです。というか、それ以上の語彙が自然に出てくる。教科書を開ける必要もなく、楽しい雰囲気の中でできる。そういう授業の組み立てをやっていました。あるとき、木村先生が事業団にいらっやして、文部省の日本語教育の講習会

だと思うんですけど、「視聴覚教材の使い方について講師をやるんだけど、実例として紹介したいからこれを貸してくれ」っておっしゃったので、お貸したこともあります。

あのころ、授業で教室に行くとき、教科書だけ持って行く先生はほとんどいなかった。今の若い先生がどんな授業をしているのかよく知りませんが、教科書だけではいい授業ができるはずがないと思っていました。だから、後で教師養成の講習会に呼ばれたときなどに、活用練習などに使う動詞や形容詞の絵パネルなどを見せたり、作成した教材の実例や使用方法などを紹介し、何に使うかわからないけど、おもしろいと思ったおもしろいや模型や絵・写真などがあつたら、集めておくことを勧めていました。良さそうな写真があつたら、板目紙に貼ってためておく。で、ストックの中から、教える項目に適当なものを抜き出して教室に持って行く。教科書が決まっていれば、毎回、同じ箇所でのその教材が使用できるわけです。そうした教材が増えてくれば、練習のバリエーションが増えるわけです。おもしろい絵や写真などから、新しい練習を思いつくことも多いです。今は、そうした絵教材や写真パネルなどが市販されており、それを買える時代になりましたよね。便利になったのはいいのですが、自分で工夫していろいろな教材を作成しなくなったような気がします。教材を作ることで得られるものは大きいのですがね。

#### 2-4. 自分が楽しんで教える

海外技術協力事業団で教え始めて1年半たった1968年9月から、早稲田大学でも教え始めたんです。早稲田大学の日本語教育は、そのころ語研と国際部の2箇所で行っていたんですね。国際部というのは1年間、アメリカの提携した大学から送られてくる学生たちに、英語で講義を行うのですが、外国語として日本語が必修になっていたんです。1963年に開設され、2004年に語研といっしょになって国際教養学部に変更された組織です。たぶん木村先生が推薦してくださったのだらうと思うんだけど、内心は心配なさっていたでしょうね。学生はアメリカ人ですから、教え方に問題があればすぐにクレームが来ますからね。当時は今のように日本語教育の経験者が少なく、人材不足だったということもあったと思います。現在は早稲田大学の学籍がある人は学内で教えることはできないのですが、そのころはそういう規則はなかったんでしょうね。もらった辞令には囑託と書いてありました。

国際部では、『Learn Japanese : college text』というハワイ大学で出版された教科書を使っていました。著者のお一人である岡野（喜美子）先生が、国際部で教えていらっしゃる関係だと思うのですが。当時はオーディオ・リンガル・メソッドの全盛期ですから、パターン・プラクティスを中心とした授業が一般的でした。私は英語が得意ではないので、授業では原則として直接法で通そうと考えました。たぶん、国際部で教えていた先生は、私以外みなさん英語が堪能な方だったはずで。教科書も英語母語話者のためのものですし、授業も英語が多く使われていたのだらうと思います。私は、基本的には事業団でやっていたような方法で教えました。視聴覚教材を活用し、学生の活動を中心にする。ただ、語彙や文型の理解には誤解されないよう注意をはらいましたね。学期が終わったとき、クラスの学生が、「先生の授業の評価は、非常によかったです。」と教えてくれました。今は大学が、学生のアンケートなどで、各授業についての評価調査を行っています。当時は公式にはそんなことはしていなかった。国際部の学生の間で、公表されない教師の評価が行われていたようでした。直接法で通したことが一応評価されたのだらうと思いました。

私は日本語教師は、ある時期、徹底して直接法で教えてみたらいいと思うんです。すごく語感が

吉岡英幸，他／日本語をとおしてお互いに知り合う

磨かれますよ。どこかでそういう時期があってもいいかなと、勉強になるだろうなという気がします。何かを説明しようとする、別の意味の似たことばと誤解されると困るので、そのことばとどこが違うかというようなことまで考えなければいけない。自分の勉強になりましたね。一般的に言えば、理解には媒介語を使用しても、練習には日本語だけのほうがいいかなと思っています。

国際部にいるときに結果的に学生の評判がよかったということなんだけど、後から考えると、それは、授業だけのことでなかったと思います。学生たちと歳が近かったんですよ。それに、私は本当に授業を楽しんでいたんですよ。早稲田で教えられるという喜びがあったんです。技術研修生はそれぞれの分野の専門家で、おとなと接するおもしろさ、魅力のようなものがありました。でも、母校で、若い学生といっしょに勉強するというのは別の喜びでした。教室に行くのが楽しかったんです。東京六大学野球の早慶戦があると、一週間くらい前から校歌の歌詞を配って、その意味を教えるわけですよ、「難しいけど、こういう意味だから」と説明して、で、テープを流して「ちょっと歌ってみようか」と。そして、土曜日の早慶戦に「行く？」っていうと全員が来るわけですよ。一緒に神宮球場に行ってみんなで校歌を歌い、ほかの学生と一緒にになって応援する。そういうようなことをやっていたんですよ。そういうこともたぶん学生との関係がうまくいっていた原因かなと思うんですね。教えることを自分がほんとに楽しんでいたということが、学生にも伝わったのではないかと思います。今でも私は教室に行くことを楽しみにしていますけどね。教師が自分の天職だと思っています。

## 2-5. 日本語教師養成コースのコーディネーターを務める

海外技術協力事業団は開発途上国に対する技術協力の実施を行う機関なのですが、かなり広い分野の事業を行っていたんです。海外の日本語教育の需要も高まっており、技術協力の一環として、日本語教育のためのコースを作りたいという話がありました。結局、日本語教師の養成を行うためのコースを作ることになり、1971年から日本語会話教師養成コースが実施されることになりました。現職の日本語教師か、帰国後教師となる人を対象とした、7～9人のコースでした。海外の日本語教師が対象なのですが、事業団の性格から開発途上国が対象となっていました。ですから、東南アジアや中南米の先生に限られました。「日本語会話」というコース名になっていましたが、実際の研修内容には、4技能の習得もすべて含めました。研修期間は1年間で、科目は日本語の運用能力を高めるための日本語会話のほか、日本語学、日本事情、教授法としました。講師には、早稲田大学から木村宗男先生、森田良行先生、慶応大学から齊藤修一先生、長谷川恒雄先生、国立国語研究所から水谷修先生などをお願いしました。私も日本語会話の授業を担当しましたが、それだけでなく、コース全体の授業計画やカリキュラム、講師への依頼や連絡、見学や研修旅行などの手配など、実施に必要なことをすべてやりました。事業団には日本語教育の専門家はいないので、私が担当職員と連絡をとりながら、コースのコーディネーター役をやりました。もっとも、コースの代表者は私では務まらないので、木村先生をお願いしていましたが。おもしろかったですね。予算的なことはあまり窮屈なことは言われなかったので、TICでの授業だけでなく、見学、合宿、各地の旅行なども計画しました。私もいっしょに旅行や合宿などに行きました。精神的に不安定になった研修員のために、TICの部屋に一晩つきそったこともありました。“寝食をともにする”ということばがありますが、そんな感じで接していましたね。国際交流基金が1972年に創立されていたため、文化的な事業はそちらで行うということになり、このコースは3年間で終了しました。教師養成のコース運営に関わるあらゆることが経験できたということは貴重な経験でした。



### 3. 日本語教師を生業とする気持ちを固める

私の大学院の専攻は日本文学で、中世和歌の研究をしていたのですが、現実には日本語を教えることやその準備に忙しくて、研究からはだんだん遠ざかっていく感じでした。文学研究科に入学したときから、海外技術協力事業団で教え始めて、1968年からは、早稲田大学の国際部でも。朝、TICへ技術研修生を教えに行き、午後大学院の授業に出て、夜またTICに行ったり、曜日によつたら、朝、早稲田で教えて、夜TICに行くというような生活を送っていました。そうすると、もう専門の勉強なんかできないんですよ。気が向かないんですね。教えてること自体が、だんだん面白くなってきたということもありますね。それで、とにかく修士論文を出して修了だけはしたんです。そのころは、もう自分は日本語教育の道に進もうと気持ちは固めていました。1971年から事業団の教師養成コースにかなりの時間をとられるようになっていましたし、1973年からは早稲田の語研でも教え始めました。そのとき学籍はもうなかったんで、肩書は講座講師でした。

当時日本語教育の専任のポストは非常に限られており、多くの先生は食べていけないので、いくつかの学校を掛け持ちしていました。私自身、将来のあてはまったくなかったのですが、不思議に不安はあまり感じなかったですね。教えることが楽しかったということもあったんだろうと思います。

実は大学院にいるとき一年間だけ、中学に国語を教えに行っていたんです。1968年に、桐蔭学園という横浜にある学校なんです。元々漠然とだけけど、大学に入ったときは国語の先生になってもいいなという気持ちがあり、たまたま大学院の同じゼミの人から紹介されたものだから。中学生の古典の授業を担当したんです。時々時間を取って「『から』と『ので』がどう違うかわかる？」とか、「『私が吉岡です』と『私は吉岡です』の違いは？」なんてことをやっていました。中学生がきょとんとしたけど、「日本語って考えるとこういう面白さがあるんだよ」というようなことを得意になってやりました。古典とは全然関係ないのにね。TICの昼間のコースが増えてきたこともあり、結局1年でやめました。日本語教育に専念することにしたんです。国語はまたそれなりに違う面白さがあったんですよね。中学生たちは本当に素直で熱心で、楽しかったです。

### 4. 留学生の予備教育としての日本語教育に携わる

1974年に、東京外国語大学付属日本語学校の専任講師になりました。木村先生の紹介、というより推薦していただいたのだらうと思います。この学校は、1年間で大学入学に必要な日本語や基礎科目を教えることを目的とした学校なんですね。

たぶん世界で最も恵まれた日本語教育機関だと思います。60人の定員で、全寮制で、体育館や校舎や運動場なんか全部完備しているんです。しかも17人の専任教官がいる。食堂のクックさんや、マイクロバスを運転する人までいるんですよ、この人たちは文部技官っていうんですけどね。非常に恵まれた環境ですね。教師もプロの集まりという感じで、3学期制をとっているんだけど、各学期ごとに中間試験や期末試験があって、読解とか聴解とか文法などの試験の問題案を先生たちが分担して作成し、それを日本語教師全員に回覧してチェックする。作成者のところに返ってきたときには書き込みで真っ赤になってるわけですよ。新人にとってはすごく鍛えられる。寮があるため、教育だけでなく生活指導も教師の管轄で、いつも会議や打ち合わせをやっていましたね。

吉岡英幸，他／日本語をとおしてお互いに知り合う

学生は1年後には国立大学に進学していくということが約束されているため、落ちこぼれていうのは許されないんですね。

クラスは文科系と理科系に分かれていて、理科の先生もいるし、経済なんかの先生もいるんです。健康のためにも体育の授業もあった。課外活動とかも、5月に高尾山ハイキング、6月はスポーツ大会とか、秋に運動会とか修学旅行とかもやっていましたね。日本語のクラスは、原則として二人で1年間責任をもって担当のクラスを受け持つんですよ。導入と練習という言い方をするんだけど。聴解は別にクラスをいくつかまとめてやるというやり方をしていました。日本語を教える教師は、いつも顔を合わせ密な連絡を取っていました。個々の研究室がなく教師は大部屋です。部屋に閉じこもったら指導ができないから個室の研究室は作らないという方針だということです。びっくりしたのが、日直という制度があったんです。教師は夜9時まで必ず誰かいなきゃいけない、質問などに来る学生のために。寮があるため職員は宿直があり、専門の寮監もいるのに。教育機関として理想的なことを考えて作られた学校でした。当時の日本語学校の授業や学生のことを同僚3人で書いた本が『一年で社説が読めた』です。研究社から出版されました。

この学校の学生は、それぞれの国から選抜された優秀な学生なんですね。1年間で、日本語ゼロの人たちが最後当用漢字1850字をほとんどマスターします。学期ごとの試験をやっても平均点90ぐらいですよ。1年後には大学に行かなきゃいけない、結局、困るのは自分だって知ってるんです。成績によって進学先が決まるということも無関係ではないだろうけど。8時半から4時10分まで授業があったんですが、4時10分に終わって先生が教員室に帰って来て一休みし、授業の引き継ぎや打ち合わせなどをするでしょ。そろそろ帰ろうかと思うと、夕食をすませた学生が、寮から「先生、質問があります」って来るわけですよ。それで帰れないんです、8時、9時までということもしばしばありました。もちろんできない学生を教師のほうから呼び出して補講することもあります。ある先生が、一週間どのくらい課外の指導をしたか調べてみたら、一週間の担当している授業数より多かったんですよ。そういう学校だから、学生と教師の関係が非常に濃いんですね。たった1年間なんだけど。学生が卒業して30年後に、シンガポールで同窓会やったことがあるんですが、今でも鮮明に日本語学校のことを覚えていると言うんですよ。

私は最初のころは、導入や練習の普通のクラス担当をしてたんですけど、後で聴解を全部任されたんですよ。それで結局、聴解って何が必要なんだ、何をしなきゃいけないんだと考えるようになったんです。当時あまり参考文献がなかったので、最終目標を大学の講義が聴けるようなことというふうに設定してみました。どんなことを習得すればいいのか、そのためにはどんな教材を使い、どのような練習をすればいいのか、考えるようになりました。それで、録画のための機器をそろえてもらい毎週録画して、文字化し、教材作成をやったんです。結局、日本語を聞く場合、知らない言葉があるのは当たり前だから、大切なことは知らない言葉を前後の文脈などから推測したり、要旨を把握したりすることだと考え、そのための練習をするようになりました。いわゆる聴解のストラテジーですね。早稲田に来て、聴解の授業をやることになり、その時の経験をもとにして、ピア・リスニングの方法を試みたりしました。

## 5. 中国の赴日留学生予備学校で教える

私のはじめて海外に長期滞在し、日本語を教えたのは、1986年でした。中国の長春にある東北

師範大学に設置された赴日留学生予備学校<sup>6)</sup>に派遣されたときです。この予備学校は、日本留学が決まった理工系を専門とする大学院生を中国全土から長春に集め、必要な予備教育を実施するための機関です。前期の4か月で集中的に日本語教育を行い、後期の2か月で日本語と、日本語による理科系の専門分野の教育を行います。派遣される日本語教師は4名で、東京外国語大学附属日本語学校から団長を含む2名が派遣されていました。他の2名は国際交流基金からの派遣でした。私は団長として、他の3名の先生と2月の末に北京を経由して長春に入りました。厳寒期はマイナス30度で大変だと脅かされ、覚悟して行ったのですが、雪はあまり積もらず、寒さも思ったほどではありませんでした。ただ、3月4月は空も街も灰色で、気持ちも暗かったですね。それが、5月に入ると一斉に花が咲き、街路樹が芽吹き始めます。モノクロの世界が突然カラーに変わったという感じでした。春の到来をこれほど喜んだことはないですね。自転車で町中を走りまわりました。

私にとって最初の本格的な海外生活ということもあって、異文化に身を置いて感じる違和感が面白く、ずいぶんメモをしました。授業が終わって廊下を歩いていると、日本人の女性の教師が黒板を背に当惑した様子で、男子学生の質問に答えていたんです。私も経験あるけど、対面したとき日本人が自然だと思ふ相手との距離と、握手する習慣のある国の人が立つ位置と違うわけですよ。お辞儀する場合より、握手する距離が近いので、近寄ってこられると圧迫感を覚え、つい後ろに下がってしまう。おまけにその時の男子学生は背も高く大きな体をしており、教師にかぶさるように見える。小柄な教師のほうはこれ以上下がれないので、黒板に背中を張り付けてたというわけです。本で得た知識を実地で体験した一例ですが、初めて見聞きすることも多く、毎日が刺激的でした。留学生が日本に来て生活するときは、同じように様々な違和感を感じるのだなと思いました。

朝、宿舎から送迎用のバスで大学の前に着くと、学生たちが大学の門のあたりを三々五々歩いている。中には大学の周りを囲っている低い塀の上を本を片手に歩いている学生もいる。その学生に何をしているのか聞いてみると、教科書を暗唱しているのだというんです。どうして危ない塀の上を歩くのかというと、緊張するほうがよく頭に入るからと言う。厳寒の中、教科書を片手に白い息を吐きながら壁の上を行ったり来たりして日本語を学習する様は、何か心を打たれるものがありました。そのころの中国の学生は、みんな国を背負うという意識を持っていて、ひたむきに日本語を学習していました。まだ生活レベルは日本と20年ぐらい差があるといわれた時代ですが、学生の目は輝いていましたね。授業が終わって教室を出ようとする時、「今日は宿題がありませんか、ほしいのですが。」と言われたことがありますが、学生から宿題を催促された経験はあのときだけです。暗記は中国人の重要な学習スタイルだということがわかっていたものですから、最初の時期は、学生に自由に任せるよりこちらから暗記に適切な箇所を指示して宿題にし、翌日チェックしようということにしました。こうした学習スタイルは国によっても個人によっても違うわけですが、それで思いだすのは、この何年か後、イギリスのケンブリッジ大学を訪問したときのことです。ケンブリッジの日本語の先生によると、学生は非常に優秀であり、文法に関しても納得できるような詳細な説明を求めると、大変だという話でした。したがって、初級の教科書も英語で文法が非常に詳細に解説してあります。条件の「と、ば、たら、なら」でも、初出の課で、それぞれの意味や用法の異同についてかなり詳しく説明されています。授業では文法の説明に大半の時間が費やされ、場面設定を行った会話や活動的な練習はあまり見られませんでした。日本語の授業時間数もそんなに多くないことも関係しているのかもしれませんが、理解をさせておくことが重要であり、日本に行って実際の場面に遭遇すれば、学生は十分に対応できる能力を持っているという考えのようで

吉岡英幸，他／日本語をとおしてお互いに知り合う

した。これはイギリスの特徴というよりケンブリッジ大学の日本語教育の特徴のようでした。個人や機関，国による学習スタイルの違いというようなものがあるのだと思いますが，そうした特徴を見て，それに合った教育方法を考えることが有効だということでしょうか。

## 6. 日本語教育は日本語をとおして人と知り合うこと

私は初めに技術研修員，それから留学生の日本語教育に携わってきました。数えると半世紀近く日本語を教えてきたことになります。最近では，地元の日本語教室での日本語教育や，そこに来る学習者について聞く機会が多くなったのですが，大学での日本語教育とはかなり違うようです。そこに通って来る人々は，日本語が上手になりたいという思いは共通していますが，人ととのつながりを持ちたいという思いを持つ人も多いようです。人と知り合うにしても，人とつながるにしても，まず日本語ができなければいけないわけですが，日本語教室に来ること自体，人と知り合う機会であると考えて，通う人もいます。こうした近年の日本語教育の状況を見ると，以前と比べると確実に広がり，求められるものも変わってきていることは確かです。以前は教師に必要なとされたものは，日本や日本語に関する知識であり，日本語が教えられる技能であると言われていましたが，今はそれほど簡単には言えない，複雑になってきているようです。私は，日本語教育を一口に言えば，日本語をとおして人と知り合うこと，理解し合うことであると考えています。人と理解し合うためには，お互いに信頼できる関係がなければなりません。そして，お互いの存在，立場を認め合うこと，お互いを尊重し合う気持ちが必要にならないわけでは。そういう意味で，教師が上に立って，下にいる学習者に教えるという関係，意識は極力避けなければならないですね。常に学習者の視点，立場に立つことが重要になります。また，教師の役割は，日本語をとおしてスムーズにお互いが理解し合えるような，楽しくできる環境を整えることになります。そのための努力，配慮，工夫などが必要になるんじゃないでしょうか。

このような考えは，実は非常に常識的で，当たり前のことを言っているに過ぎないですね。教育の基本であって，何も日本語教育に限ったことではないと思うんです。私がこのように考えるようになったのは，理論的研究の結果というようなものからではなく，経験的なものからです。大事なことは，その当たり前のことを研究上の理論や論文のお題目としてではなく現実の授業でいかに実践するかということだと思います。これからも，日本語教育は変化していくと思いますが，日本語をとおしてお互いが知り合い，理解し合い，人の輪がどんどん広がっていくといいと思います。

### 注

- 1) 2012年9月23日に早稲田大学日本語教育学会2012年秋季大会にて，吉岡英幸氏，細川英雄氏，蒲谷宏氏（いずれも早稲田大学大学院日本語教育研究科）の三氏による鼎談が行われた。鼎談のテーマは，「日本語教育学のこれまでとこれから—早稲田の日本語教育を基点として—」であった。鼎談は，吉岡氏へのインタビューと同様の問題意識に基づき，（古屋により）企画された。なお，2013年2月発行の『早稲田日本語教育学』13号に鼎談の文字化資料が掲載される予定である。本稿と併せ，ご参照いただきたい。
- 2) 当時のコピーは，青焼きとよばれたジアゾ式複写機で，半透明の用紙に鉛筆などで書いて原稿を作成して，それを感光紙に密着させ，複写機内を通過させる。その後，感光紙だけを水



溶液にくぐらせると、原稿に書かれた部分が発色する。複写紙は光線に弱く、退色しやすいという欠点があった。

- 3) 早稲田大学の初級の教科書は、1963年ごろから作成が開始され、試用しながら改訂が重ねられ、1967年に『外国学生用日本語教科書初級』として初版が出版された。
- 4) 『講座日本語教育』は、語学教育研究所が主催する日本語教育講習会の講義録として、1965年に第1分冊が発行された。1988年に日本語研究教育センターが語学教育研究所から分離独立して、日本語教育講習会が開催されなくなつてからは、日本語教育の調査・研究の発表誌として、2006年の第42分冊まで発行された。
- 5) 海外技術協力事業団（OVERSEAS TECHNICAL COOPERATION AGENCY, JAPAN）には、専任の日本語教師はいなかった。そのため、吉岡氏が事業団の担当職員と連絡をとりながら教務的な仕事もしていた。
- 6) 赴日留学生予備学校は、中国政府の派遣留学生が日本の大学で研究するのに必要な予備教育を行う目的で、1979年に東北師範大学内につくられた機関である。当初学部学生が対象であったが、1983年から修士課程の大学院生に切り替えられた。

表 吉岡英幸氏と日本語教育

日本語教育の流れ	年	吉岡氏と日本語教育	吉岡氏が携わった教材
・外国人のための日本語教育学会創立 ・早稲田大学語学教育研究所開設	1962		
	1963	早稲田大学文学部に入学	
文部省（現、文部科学省）に留学生課設置	1964		
青年海外協力隊発足	1965	早稲田大学語学教育研究所でアルバイトを始める。 →「1. 日本語教育との出会い」	
	1967	・早稲田大学大学院文学研究科に入学 ・海外技術協力事業団（現、国際協力機構）TOKYO INTERNATIONAL CENTERで日本語を教え始める。 →「2. 日本語を教え始める」	
文化庁発足 外国人留学生問題研究会（後に国際教育交流協議会）発足	1968	・早稲田大学国際部（現、国際教養学部の前身）で日本語を教え始める。 ・桐蔭学園中学校にて1年だけ国語を教える。 →「3. 日本語教師を生業とする気持ちを固める」	
東京外国語大学付属日本語学校開設	1970		
国際交流基金発足	1972		

## 吉岡英幸，他／日本語をとおしてお互いに知り合う

日本語教育の流れ	年	吉岡氏と日本語教育	吉岡氏が携わった教材
	1973	早稲田大学語学教育研究所で日本語を教え始める。 →「3. 日本語教師を生業とする 気持ちを固める」	<i>Japanese Conversation an Intensive Course</i> , OTCA
	1974	東京外国語大学付属日本語学校 着任 →「4. 留学生の予備教育としての 日本語教育に携わる」	
・(外国人のための日本語教育学会を改組し) 社団法人 日本語教育学会 設立 ・社団法人 国際日本語普及協会 (AJALT) 設立	1977		『中国人(理科系) 学生のための日本語(一) 試用版』東京外国語大学付属日本語学校
インドシナ難民のための定住促進センター開設	1979		
国際交流基金、北京に日本語研修センター開設	1980		
	1982		『ビデオ「3年たって、恋」学習者用テキスト』、『スライドバンク「場所シリーズ」解説書』国際交流基金
	1983		『教師用日本語教育ハンドブック・教科書解題』国際交流基金
・中国帰国孤児定着促進センター開設 ・日本語能力試験開始	1984		
	1985		『日本語(Ⅰ) 一試用版』東京外国語大学付属日本語学校
・国際協力機構(JICA)、日系社会青年ボランティア派遣開始 ・国立大学日本語教育研究協議会発足	1986	中国東北師範大学赴日留学生予備学校に団長として派遣される。 →「5. 中国の赴日留学生予備学校で教える」 東京外国語大学留学生教育教材開発センター着任 →「4. 留学生の予備教育としての日本語教育に携わる」	『基礎日本語学習辞典』国際交流基金
・国際文化フォーラム設立 ・JETプログラムの日本語研修事業開始	1987		『日本語教師養成通信講座・日本語の文法3』アルク
日本語教育能力検定試験開始	1988		『日本語(Ⅱ) 一試用版』東京外国語大学付属日本語学校
	1989		ビデオ「留学生のための現代社会・高度経済成長」東京外国語大学留学生教育教材開発センター、「視聴覚教材」『日本語教授法』おうふう

日本語教育の流れ	年	吉岡氏と日本語教育	吉岡氏が携わった教材
国際交流基金、北京に日本語研修センター（通称「大平学校」）開設、海外日本語センター開設開始	1990	早稲田大学日本語研究教育センター着任 →「4. 留学生の予備教育としての日本語教育に携わる」	『「高度経済成長」教師用指導書、同学習者用ノート』ビデオ「留学生のための現代社会・憲法と日本人の生活」東京外国語大学留学生教育教材開発センター、『一年で社説が読めた』研究社出版、「視聴覚教育」『日本語教育への道』凡人社
国際研修協力機構（JITCO）設立	1991		
	1992		『中級文型例文集』早稲田大学日本語研究教育センター、『日本語教材概説』北星堂書店
	1993		『日本語をまなぼう2』文部省
	1994		『日本語をまなぼう2 教師用指導書』文部省
	1995		『写真パネルバンク1・衣食住と道具シリーズ』国際交流基金
JETRO（日本貿易振興機構）ビジネス日本語能力テスト開始	1996		『写真パネルバンク4・行事シリーズ』国際交流基金
	1997		『写真パネルバンク2・社会生活シリーズ』国際交流基金
	1998	早稲田大学日本語研究教育センター所長就任	『写真パネルバンク3・自然と余暇シリーズ』国際交流基金、『商貿日語』中国浙江大学
	2000		『写真パネルバンク CD-ROM』国際交流基金
早稲田大学大学院日本語教育研究科開設	2001	早稲田大学大学院日本語教育研究科研究科長就任 ※吉岡氏が大学院の立ち上げにどのように関わったかに関しては、本稿の注1で触れた「鼎談：日本語教育学のこれまでとこれから—早稲田の日本語教育を基点として—」を参照のこと。	
	2007		『新世紀日本語教程中級』中国外語教学与研究出版社
	2010		『基礎日語総合教程』中国高等教育出版社、『効果的速成式標準日本語読本・復刻版』冬至書房
	2012		『台湾総督府日本語教材・復刻版』冬至書房